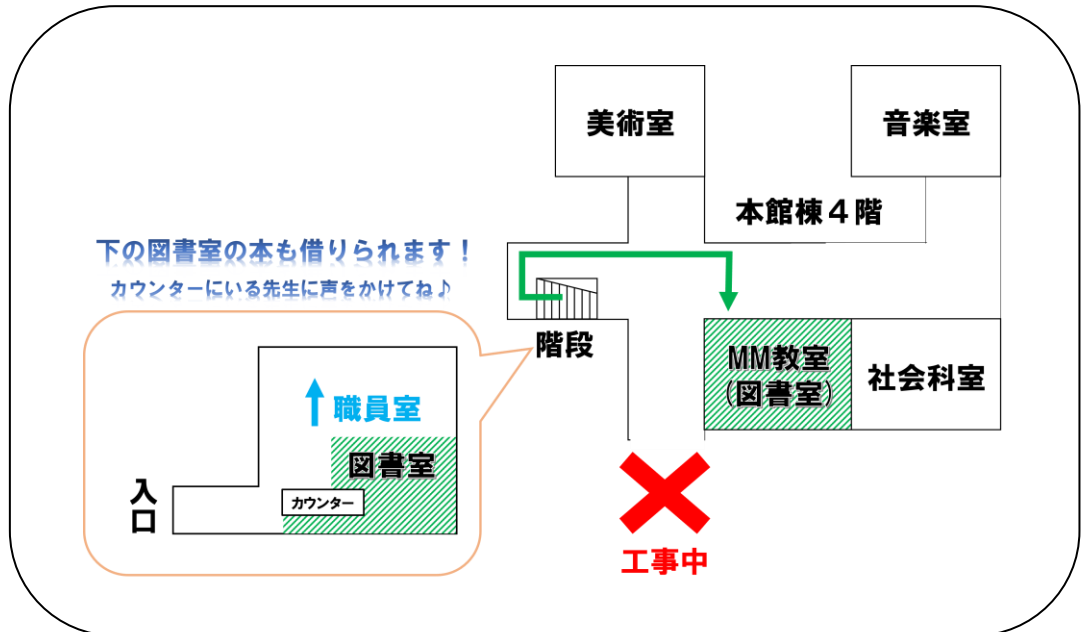


図書館通信

第 3 号
R05. 10. 06
美和高校
図書部

図書館閲覧室、ただいま本館棟 4 階に移動中！



10月になりました。ようやく、朝晩が涼しくなって秋の気配が見えてきましたね。
秋は読書に適した季節です。秋の夜長は、本を読んで過ごしてみませんか。

また、夏休みが明けたら、職員室が図書館へ移動していて驚いた人も多かったのではない
でしょうか。1か月たって、ようやく慣れてきましたね。……でも、図書館はどこへ行って
しまったの？と思いませんか？

現在、図書館は職員室入り口付近とMM教室の2か所で開館しています。

どちらの部屋でも、本の貸出・返却をすることができます。職員室ではカウンターの先生、
MM教室では図書委員に本を渡して手続きをしてください。また、本を読んだり、
勉強をしたりするスペースはMM教室に設けられています。場所は本館棟4階、
社会科室の隣です。ぜひ、気軽に訪ねてみてくださいね。



文化祭での図書館

文化祭のとき、図書館の展示に来てくれましたか？会場では、3年生図書委員による企画「氷点下の世界・南極」を展示していました。ペンギンの生態や南極観測船についての紹介、ペンギンの折り紙や氷山の展示などをしていました。



また、図書館では「雑誌バックナンバー譲渡会」を行いました。本校の雑誌譲渡のリユース活動は、平成27年から実施されている企画です。



36名の応募があり、137冊が配布されました。特に『オレンジ・ページ』が大人気でした。大人の雑誌『サライ』も渋好みの美和高生が応募していました。来年は、是非あなたも応募してみてください。

☆全国読書週間「お楽しみ抽選会」10月27日～11月9日！

今年もこの期間中に図書（漫画は除く）を1冊以上借りた生徒に「抽選券」を渡します。



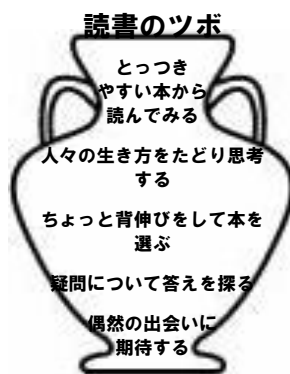
*一人につき1回の抽選チャンスですので、重複した応募は無効になります。

*期間後抽選→当選した景品をプレゼントします。厳選なる抽選の結果は景品の発送をもってかえさせていただきます。

読書感想文コンクール結果

今年も1・2年生の皆さんに読書感想文に取り組んでもらいました。普段、本と縁遠い人も、自分自身で一冊を手に取りページを開くという「本との出会い」の瞬間を経験できたと思います。ステキな本と出会えましたか。

最優秀賞作品は「第69回青少年読書感想文全国コンクール」に応募しました。裏面に全文を掲載しましたので、読んでみてください。



最優秀	2-3	「同志少女よ、敵を撃て」を読んで
優秀	1-5	失敗すら楽しめること

読書感想文最優秀作品

「同志少女よ、敵を撃て」を読んで

戦争という言葉を目にして、何が思い浮かぶだろうか。私は真ッ先に、ロシアのウクライナ軍事侵攻という言葉が浮かんだ。約一年半前に始まったウクライナへの軍事侵攻は、ニュースでもよく報道されていた。その報道や学校での授業、インターネットなどによって伝わった僅かな情報だけで戦争を知った気になっていた自分を、今となっては恥ずかしいと思う。

修学旅行で広島へ行くため、戦争を知るのにちょうど良い機会だと思って買ったこの本を読んでいたとき、そうか、私は今まで「ロシアのウクライナ軍事侵攻」という名の映画を観ていたのだ、と思った。映画に登場する怪物がスクリーンの中からは出てこないように、あの戦争の牙がこちらに向くことはない、とどこか達観している自分に苛立ちを覚えた。

この本の主人公は、私と同じ十六歳の少女セラフィマだ。平和に過ごしていた彼女に、戦争の牙は容赦なく噛みついた。この本では、女性の狙撃兵として育てられていく彼女の視点から、女性兵士への冷たい視線や戦争捕虜となった女性への扱いの惨さ、戦争の残酷さが書かれている。はじめは復讐に燃えていた彼女の心が、戦友や上司によって変化していく様子に何度も胸を打たれた。これまで知らなかった戦争の現実をこの本は教えてくれた。そして私はこう考えた。

もしも戦争になったら、私はどうするか。初めて抱いた考え。家族と共に身を潜めるのか。あの戦争捕虜のように権力者の声に従い、怯えながら毎日を過ごすのか。あの兵士たちのように、暑さにうなだれ、寒さに凍え、飢えを凌ぐ日々を送るのか。それならば医療を学び、ターニャのように負傷兵を救いたいとか、セラフィマのように武器を持って戦地へ向かおうとか、様々な答えが頭をよぎる。私が戦地へ向かうと言えば、ある者は止め、ある者は笑うのだろう。なぜか。それは私が女だからだ。もし戦争になったら、私は結局家族と共に過ごすのだろう。きっとそれが一番の平和だからだ。では、ロシアのウクライナ軍事侵攻に関わっている人たちは、今日をどのような思いで過ごしているのだろうか。

どこかで聞いた、毎朝近くに落ちる爆撃音で目を覚まし、シェルターに隠れ、昼も暗闇の中で過ごしているというウクライナの人の話。どうして人を撃てようか、でも逃げ

れば処刑されるんだ、と憔悴しきった顔で話すロシアの人の話。どちらも望んでいないのになぜ戦争は起きてしまうのか。戦争がなければ彼らは今も平和に暮らしていただろうに。この本のように、今この瞬間も、撃ちたくない人を撃ち、仲間が倒れるのを横目に復讐心を燃やし、仇討ちだと言わんばかりに死へと進んでいく人たちがいるのではないか。そんな人たちのために、何か私に出来ることはないだろうか。そうは思うけれども、なんの力も持たない私に出来ることなんて、ほぼ無いに等しい。私も含め皆、哀れみや同情こそすれど、一体それが何になるというのか。昔のドラマの台詞にある、「同情するなら金をくれ」とはよく言ったものだ。私たちにできることはあるのだろうか。

私は、戦争というものを脳の隅へと葬って傍観している。それほどまでに自分と戦争には縁が無いのだと思う。この争いのない土地に生まれ、親や権利に守られて自由に育ち、個人として人生を歩むことができる。このように平和に過ごしている私たちがすべきことは何か。それは二度と戦争繰り返さないことだ。この本のおかげで、戦争は他人事ではないと気づくことができた。歴史は繰り返すと言うが、戦争だけはそうならない、と強く思う。

修学旅行先の広島では、原爆投下の跡地で見つかった遺品を見たり、生々しい戦争の話の聞いたりするのだろうか。教科書で学んだものよりも、もっと凄惨な事実を突きつけられるのだろう。原爆投下から七十八年が経ち、世間から戦争の記憶が薄れつつある今、いずれ将来を担う私たちがその事実を受けとめ、後世に教訓として伝えていくこと。これが私たちに出来ること、やらなければならないことなのだ。

